



フランスの少年囲碁チャンピオン、来日



左からトマ・ドゥパール君、アレクシー・ヴェヴェール君、トマ・ユベール君

昨年、日本囲碁普及振興会(佐川八重子会長)と日本棋院(利光松男理事長)を中心に始まった試み「日仏青少年囲碁交流」の「フランス青少年囲碁交流日」も、今年で2回目。フランス囲碁ユース大会で勝ち抜いた小、中、高それぞれの優勝者3人がまたこの秋訪日した。

のプロ棋士の対局指導を受けたりと、充実した日程をこなした。帰国する前日は、囲碁将棋チャンネルの番組で、トマ・ユベール君(15)が、水間俊文七段の対極指導で出演。日本棋院で行なわれた収録は、2時間以上に及ぶ指導碁となった。

収録を見学に来た他の二人も、途中から碁盤を持ち出し、モニターを見ながら、実際に打ち始め、研究に余念がない。



CS放送『囲碁・将棋チャンネル』での収録：2004年2月放映予定

自分と同じ手が出たときは、いかにもうれしそう。ユベール君の代わりに対戦したかったかと聞くと、大きく頷いていた。対局の結果は、水間七段の16目勝ち。特に前半、思うように調子を出せなかったユベール君は、間違った手が悔やまれてしかたない様子。「気持で負けていた」と、疲れを隠せなかった。番組の監修役であり、この交流会の企画考案者でもある小林千寿五段は、幼い頃から彼を知るだけに、「よくここまで強くなった」と感慨深気。昨年度全仏ユース大会で彼と対局している水間七段は、「反発すべき時は反発すべし。それができるといえるならば、一皮むける」とアドバイスしていた。



対局を見守る指導者と、2人のチャンピオン

3人は、同年代の日本の子供たちと碁を打てたことが何より楽しかったと声を揃えた。特に、憧れの加藤正夫本因坊に会えたのがうれしかったと、ドゥパール君。また、武宮正樹九段との3面打ちの指導碁の際、アレクシー・ヴェヴェール君(13)は7目で勝ち、貴重な体験となった。帰国を前に、ヴェヴェール君は「また訪日したい」と繰り返し、ドゥパール君は「あと1週間日本に滞在できたら」と、3者3様、それぞれの思い出を胸に、フランスへと帰国の途についた。フランスでは、少年ジャンプの漫画『ヒカルの碁』が出版されて以来、院生になりたい子供が急増しているという。「日本は、彼らを受け入れる体制を整えることが課題」と、小林五段は強調。10歳にして、すでに院生希望のドゥパール君。彼が1日も早く囲碁留学できる日が来ることを待ち望んでいる。

芸術は、 支出すること自体が 健全さの証

フランス語圏現代舞台芸術の創造と交流 第6・7回が、早稲田大学21世紀COE演劇研究センター・文学部演劇映像専修主催、世田谷パブリックセンター、セゾン文化財団協力、当財団助成によって、11月17日と20日の両日、早稲田大学で行なわれた。講師は、

と、今フランスで何が起きているかを検証する。芸術に対する公的支援の発展とその限界の、2つの講演会が開かれた。

アンテルミタンは芸術にとって血液のような存在

昨年当財団助成による上演を行なった『屏風』演出家のフレデリック・フィスパック、そしてトゥール国立振付センター芸術監督であるベルナルド・モンテの2人である。司会担当講演を企画した早稲田大学文学部教員、藤井慎太郎氏があたった。

ヨーロッパ舞台芸術の今を代表する2人のアーティストを招いての催しである。自らの軌跡を重ねながら展開する舞台芸術論としての『現代舞台芸術のいくつかの美学的傾向』



フレデリック・フィスパック氏



ベルナルド・モンテ氏

中でも特に興味深かったのは、20日に行われたレクチャーだった。それはこの夏、アヴィニヨン演劇祭など国際的舞台芸術祭を軒並み中止に追い込んだ、『アンテルミタン』と呼ばれる文化芸術に携わるフリーランスのアーティストとスタッフの失業保険制度についてだった。これは労働協約により創設され、年間507時間間の文化的労働が認められれば、仕事がない期間も失業保険が給付され、所得が保障されるものである。フィスパックは「映画だけでなくTV

や舞台、また舞台の場合も小劇場から国立劇場まで、ジャンルや劇場の規模を越えて自由に仕事の場を求められることで、人材の持つ経験や知識が流動的に各現場で活きる。それはまるで体内の血液のような存在だ」と、アンテルミタンを表現。またモンテは、ある作品を作りあげると、4年かかったが、失業保険による生活の保障なくしては実現できなかったと、自身の経験を披露して、この制度の必要性を訴えた。

観客は消費者で、観客席を埋めることは生産か

しかし制度の濫用などから、大きな赤字を抱えたことで、制度自体が危機に瀕したため、改革案が提示。最も厳格な被るのがダンサーや俳優であり(アンテルミタンの3割)、失業保険の給付を全く受けられない事態に陥る可能性もあるため、この夏の大規模なスト決行となったのである。その背景には、経済を中心とした政策で成功しているヨーロッパ統合が大きく影響しているという。そして公共という領域でも、「客を消費者と、観客席を埋めることを生産と呼ぶなど、企業で使われるような言葉が飛びかっている」と、フィスパックは指摘。単なる言葉の変化だけのように見えるが、重要な傾向だと警告を発した。

「芸術文化など、目に見えないものは、お金を生み出さないとといった否定的な考えの傾向がはじめています。が、本来芸術は、支出すること自体

に健全さの証があるのです。」公的資金の出所は、もとを正せば、市民のお金である。ならば、もう一度市民に返すのが道理。市民に再分配されるべきはずのお金だと、2人は主張した。

芸術は最大多数の人の手の届くところにあるべき

演劇界では少数ではあるが自己資金でやっている劇団が存在する。しかしダンスは公的機関だけがその活動を支える世界。そのダンサーの立場から、モンテは、「芸術の対象はあくまで一般大衆であり、芸術が最大多数の人の手の届くところにあるべき」必要性を説き、経済的に恵まれない地域の子供などを対象にした上演や刑務所で収監されている女性たちにワークショップを聞くなどの活動も実施。

また芸術監督についても、フランスでは予算と人事に関してすべての決定権を持ち、文化省などの行政と直接交渉にあたるという政治的な役割も果たすと説明。日本では静岡県舞台芸術センターなどを除き、非常

勤の囁き扱いではない立場の違いを明らかにした。ただし、フランスでも芸術監督を置いているのは国立の演劇・振付センターなどに限られ、その他の公共施設では管理部門のディレクターしかいないのが現状。しかも最近では劇場を企業と見なし、管理ディレクターを増やし、芸術監督を廃止する傾向にあるという。

その他、舞台芸術制度の歴史、国立劇場と地方の劇場の公的資金の分配の実際、芸術家育成の教育などまで2人の話題は多岐にわたった。

文化を社会の問題と捉え、手厚く支援してきたのがフランスである。しかしその文化の国が、市場論理の波を受け、様変わりし始めているのではないか。ゲスト2人の話にその危機感がうかがえたレクチャーであった。会場は、学生を中心に約70人あまりが耳を傾けたが、予定時間をオーバーしても質問者は尽きず、盛り上がりを見せつけた。フランスで現在活躍する2人だけに、話の内容は真に迫り、日本の学生達はその迫力を肌で感じ取ることができたであろう。

Petite note

編集後記

フランスでワインの消費量が落ち込んでいる。少しでも飲む量を増やしてもらおうと、レストランでの飲み残しを持ち帰ることができるようになったとか。
アメリカからやってきたドギーバッグ習慣。果たして定着する？

(I) 笹川日仏財団ニュースレター
La Lettre

2004年1月発行 Vol. 8 No. 1
発行人：富永 重厚
編集人：関 見典
発行：笹川日仏財団
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2
TEL：03 (6229) 5448
FAX：03 (6229) 5449
E-mail：t-ito@spf.or.jp
http://www.spf.org/ffjs/

では、60数カ国の大臣などがアクリルボードに平和メッセージを實際に書き込んだ。単に書くだけの行為だが、世界中の人の目に曝されるとなると、エネルギーを要する。全てのメッセージを読んでから書くこととしたある大臣は、いざ書くかと思つたら、会場の閉館時間が迫り、思うように書けなかつたというエピソードがあつたという。

「つまり21世紀に生きる一人として、自分は何を考え、何をやるのか。そのきっかけとなつてほしいという私のメッセージが、ここにはあります。それは、行動です。行動に結びつけていくことが、世界を変えていくことになりまふ。アートは、みんなの心を紡ぐ役割がある。いくら私一人がしゃかりきになつても、何も始まりませんからね」

リズムを刻み、歌い、踊りながら、両手で描く

人間をもう一度見なおそうとする新世紀の幕開けに、サイさんの作品が選ばれた理由の一つに、内包した身体性がある。彼女は、両手で絵を描く。しかもリズムを刻み、歌い、踊りながら、時に走りながら：

「油絵は、ベタベタと塗り重ねていき、やり直しが効くアートです。でも、私の表現は、足の爪先から髪の毛の一本一本まで、感情や思いが凝縮されて、一気にほとぼるもの。それを、片手で描く油絵の手法は私には合いませんでした。私は昔、踊りをやっていました。画家は、お酒や煙草などで作品を客観的に見る小休止の時間を持ちますが、私の場合、お酒の代わりが踊りでした。踊りながら作品を眺めているうちに、いろいろな発見があつたのです。そんな体験から、知らないうちに両手で描くようになりまふ。ピアノを片手で弾く人がいないように、両手で描くことは、私が私らしく表現するのにふさわしい方法だつたと発見したのです」



往々にして現代人は、身体性を忘れがちである。しかし



いくら高い志を持つて行動しようと思つても、それに伴う身体が整つていなければ、目的をやり遂げることが不可能だというのが、サイさんの考えだ。

95年、サリーヌ・ロワイヤルでの初展覧会の際、500メートルの作品を書き上げた時には、死をも意識したという。しかし反面、体そのものが描くことを欲している体験をする。「このままだとエネルギーをすべて絵に吸い取られて死ぬかもしれないと思ひました。でも、体が描けと命令しているのです。もう、止まらな。い。そのとき、まあ、死んでもいいかと思つたんです(笑)。そうして全身全霊で描きあげました。以来、身体性は宇宙だと思ひます。ですから、私の絵は、自分が描いているというよりも、第三者の宇宙的力に押し流されて描いているのです」

想像力を喚起させるサリーヌ・ロワイヤルで21世紀の新プロジェクト

さまざまな違いを持った人々が共に集い、互いを理解するには、相手の立場に立つて、いかに考えられるかが問題となる。そこで必要とされるのは、想像力である。想像力は、民族、宗教、貧富、年令、性別、職業などあらゆる壁を越えて、人々が集まることから生まれる。21世紀が平和と文化をめざす世紀だとすれば、平和には、想像力が不可欠だ。

今回のプロジェクトの会場となつたサリーヌ・ロワイヤルは、18世紀末に宮廷建築家クロード・ニコラ・ルドゥによって設計された産業施設である。夢想家だつたルドゥは、「人間が人間の尊厳を持つて生きられる場」という都市概念をつくり、理想都市としての建築に着手した。

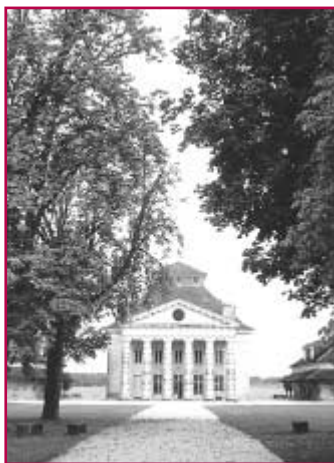
今も残る半円形の都市は、製塩所のほかに、監督官の家、礼拝堂、作業所、住居などがあり、現在では、その多くの建物は、博物館やギャラリー、レストラン、宿泊棟となつて利用されている。そして現在、国際会議ばかりでなく、熱気球国際大会や音楽イベント、自転車レースとして名高いツール・ド・フラン

ス出発点となつたりと、老若男女が楽しめる幅広いジャンルのイベントが企画され、人々の交流の場となつている。そのサリーヌ・ロワイヤルで、21世紀のためのプロジェクト

が始動したことは、意味深い。

「初めて訪れたときに、建物に入つた途端、私の耳には、すばらしい曲が鳴り響いて聞こえたんです。いい建物は、音がする。そして元気をくれます。私は一目惚れしてしまいました。今ある便利さとは違う、人間的になれる多元的要素ある建物が、18世紀にすでに生まれていたことに、とても刺激を受けました。サリーヌ・ロワイヤルは、想像力を喚起させてくれる場所。だから大人と一緒になつて子供までが出会えるイベントなど、発進型の使い方が自然に生まれるでしょう。まさに世界遺産の意味が、ここにあるのです」

サイさんの作品は、なぜか子供たちがベタベタと、手で触つていて姿を多く目にしたという。恐らく子供が本能的に引き付けられる何かが、作品から発しているに違いない。平和の世紀にむけ、五感が開かれるべき場所と人を得て、プロジェクトはスタートしたのである。



五感を開いて、 自分を知るアート



フランスで世界遺産に指定された
サリーヌ・ロワイヤル(王立製塩所)内に、
マルチメディアセンターを開設する
プロジェクトが生まれ、
当財団の助成事業の一つとなった。



この芸術責任者に選ばれたのが、日本人で環境アーティストのサイ・ヒロコである。

「彼女の才能は、数世紀に一人、稀にみる才能だ」と、
クロード=ニコラ・ルドゥ財団会長のセルジュ・アントワーヌ氏に言われた、
サイ・ヒロコさんに取材した。



ハイテクが隠し味。 部屋全体の空間を使った立体的作品

戦争で明け暮れた20世紀は科学万
能に陥り、人間性を置き忘れた世紀
だった。だからこそ、21世紀は人間
性回復の世紀。来たるべき時代を平
和と文化の世紀にしよう。そのとき、
人類で共有できる感覚は、美である。
美に対する醜は、多くの感覚を生む
が、美しいと感じるものは、親子の
愛情も含めて、不思議の一つ。宗教、
民族などを越えた世界共通の感覚で
ある。美こそ21世紀に求められる価値
だという理想を掲げて、サイ・ヒロコ
は99年フランスでプロジェクトをス
タートさせた。

戦後、ハイテクが一人歩きした時
代を経て、ハイテクがアートに包ま
れ、隠し味となって融合した作品と
いえる。それもキャンバスという枠
から解き放たれ、壁一面、部屋全体
の空間を使った立体的作品。しかも
その空間は、観賞者も一緒に巻き込
んで体感する参加型である。五感に
訴える装置のしかけがあることなど
から、「新しい四次元アートを完成
させ、モダンアートに革命をもたら
した」と、高い評価を得ている。

個性を引き出す装置として アートがある

今回の作品の一つ。ある部屋には、
サイさんデザインによる長椅子が置
いてある。それは、イヤホーンを通
して音楽が流れ、バイブレー
ションが快く体を刺激するポ
レイソニック的効果のある長
椅子だ。

「ここを訪れた人が、長椅子
に横たわってリラックスする
ことで五感が開かれ、アートを
体感することで、自分自身を
発見することができるように
と思いました。人は一人一人
違う生き物です。その個性を
引き出す装置として、アート
があるのです」

21世紀は、今まで以上に、
人間とは何か、人間として
社会の中でどうあるべきな
のか、など、基本的な個人の

姿勢を追求する精神が求められてい
く。そのために芸術や文化があると、
サイさん。向かうべき方向性を失っ
た世界観しか持たない現在、宗教に
代わるものとして、芸術や文化の果
たず役割は大きい。

「今までアートといっても、それは
芸術家のものであって、一般大衆とは
かけ離れていました。そのアートから
もっとも遠い人々を巻き込みたい。
そしてアートが人々にとってより身
近なものとなって欲しいのです」

97年、UNESCO 50周年記念式
典の際に創作したメッセージアート
では、インターネットで結んだネット
ワーク展開をし、各国大統領からの
メッセージが届いた。国内でも、FM
ラジオとタイアップして全国からの
声が届けられた。参加する重要性
を説くサイさん。たとえば、本会場